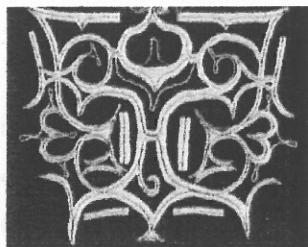


# N P O J C P N E W S

No. 11

2005. 7.31



- ・副理事長就任にあたって
- ・特集 東京国立博物館  
　　文化財保存に向けた東博の実践  
　　保存修復の現場から「コミュニケーションで守る作品の『心』」
- ・書籍紹介『古典籍が語る ー書物の文化史ー』
- ・JCP事務局通信

## 副理事長就任にあたって

私の分野は文化財保存学で、特に記念物、遺跡等屋外文化財の保存、修復を専門としております。また、アジアを中心とする世界の文化財の保存修復国際協力事業に関わってまいりました。

今回、文化財保存支援機構の副理事長に就任するにあたっての抱負を簡単に述べますと、下記の通りです。

1. 文化財保存支援機構を、草の根のボランティア団体から脱却させ、プロの集団として、事業展開の経営感覚を持った専門的事業体として発展拡大させる。
2. 事業は基本的に当機構の目的を達成するための社会貢献事業であるが、それは国内に止まらず、海外に視野を広げ、眞の国際貢献ができるNGOへと成長させる。

上記を達成するためには、文化財保存修復分野を代表する専門家とのネットワークを構築することが必要であり、そのための組織の確立、充実が求められることから、緊急の課題として経済基盤の確立に取り組むべきと考えます。

現在、文化財保存修復の世界はまだまだ発展伸長の途上にありますが、さまざまな機関が縦割りで整理されないまま進んでいる観があります。その中にあって、多分野にわたるネットワークを生かし、コーディネイト得意とする当機構の役割は、益々重みを増していくものと思われます。

今後、有為の人材を、文化財の専門家のみならず経済人、文化人から広く募り、一層機能を充実させていく必要がありましょう。微力ながら、お役に立てればと思っております。

西浦 忠輝 (國士館大学教授)

# 東京国立博物館

## —文化財保存に対する取り組みを中心に—

今号は、東京国立博物館（以下、東博とも表記）の文化財保存、特に文化財修理に対する取り組みを中心にご紹介したいと思います。

当機構は発足当時より、東京国立博物館保存修復課課長 神庭信幸先生のご理解を得て、さまざまな形で事業協力をさせて頂いています。

公的機関とNPOの協働は、昨今ますます重視されるようになっています。その理由のひとつは、規模の違いはあっても公共の利益を提供するという点で、立場を同じくしている所にあると思います。行政は広い視野から最大公約数の公益を図りますので、どうしても掬いきれない部分が出てしまします。NPOは行政の網の目にかかるないところをきめ細かくケアすることで、相互補完的に働くことができます。

具体的には、平成14年より、東京国立博物館修理室において、同館が収蔵する浮世絵のブックマウントを、酸性紙から中性紙に交換する作業を行ってきました。毎年平均して三百数十点をマウントし、現在も作業を続けています。

マウントと言うと、本紙を台紙に固定するだけの、簡単な作業と思われるかもしれません。しかし1点1点の保存性を考え、また展示の際の見せ方なども考慮に入れつつ最適のマウントを施すには、館のスタッフと綿密なディスカッションを重ね、仕様／材料を決定していかなければなりません。そのためには館のスタッフの要望を咀嚼する知識と技術力が要求されます。文化財保存支援機構では、副理事長の大林賢太郎氏をリーダーとして、十分に経験を積んだ会員を投入し、館の要望に答えてきました。当機構のシステムとして、ひとつの会社に所属する技術者ではなく、全国にまたがる幅広い人材から評議員が検討し、博物館の要求基準に合致した技術者に協力をお願いしています※。このため技術者同士オープンな技術交流を行うことができ、また博物館のスタッフと交流することによって先進的な情報に接する機会も増えることと思われます。最近は、掛け物の紐や軸首の取替えなど、応急の手当てにも協働作業の幅が広がってきました。今後は修復技術者を目指す若い人も研修生として参加してもらい、人材の養成を目指して行きたいと思っています。

こうしたNPOならではのシステムは、今後他の公的施設においても広がっていくのではないかと思います。東京国立博物館での協働体制を、ひとつのモデルケースにできたらと思っております。

※平成14年度	大林賢太郎（プロジェクトリーダー）／島田達生（運営会員）	2名
平成15年度	大林賢太郎（）／島田達生／竹内進一（登録会員）竹内朋世（登録会員）	4名
平成16年度	竹内進一（）／大林賢太郎／竹内朋世／松苗 功（登録会員）	4名
平成17年度	大林賢太郎（）／三浦功美子（登録会員）／松苗 功	3名

東京国立博物館では、当機構を活用する以外、さまざまな形で理想的な文化財保存システムの構築に努めています。

今回は、神庭先生に、東京国立博物館が目指す文化財保存のあり方についてご寄稿いただきました。またその具体的な事例として、館内で修復をしている染織品修復師の石井美恵さんにインタビューを試みました。

# 文化財保存に向けた東博の実践

独立行政法人国立博物館 東京国立博物館文化財部 保存修復課長 神庭 信幸

## ●環境保全計画

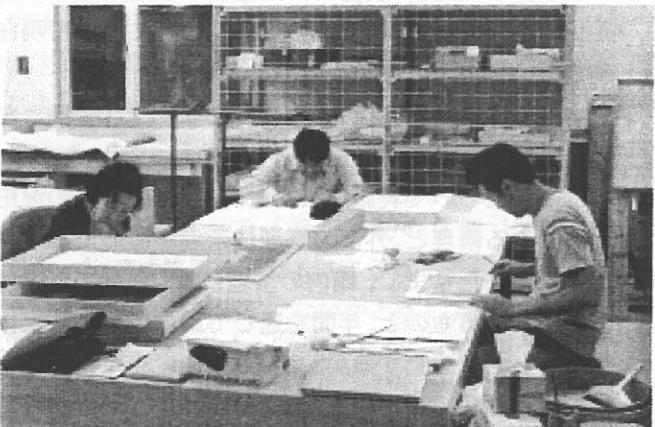
文化財は博物館のコレクションの一つに加えられたときから、個別の管理を離れ、大規模な集団の中で管理と保存が行われることになります。分散的管理から集中的管理の環境に移行した文化財には、劣化や損傷が同時期に集団的に発生するリスクが存在すると考えられます。リスクを評価し、それを軽減する活動を環境保全計画(Preventive Conservation)と言います。

博物館における保存修復の仕事は、博物館の中で発生する文化財のさまざまな劣化現象と、それを引き起こす要因に具体的に対処することです。空気、生物、光、災害などのさまざまな影響から、博物館の環境を長期間にわたって守るために、保存科学的な処置を講じながら、劣化の進行が小さくなるような安全な環境を作り出す必要があります。建物が古い場合には、このような活動が特に大切になります。また、特別展の開催のために移動する文化財の数量は近年ますます増加していますが、このとき文化財は輸送中の振動や衝撃、あるいは学芸員による取り扱いの影響を受け、目に見えない劣化が蓄積している可能性もあります。輸送に対する安全の確保と向上は、事故を未然に防ぐためだけではなく、将来にわたって作品の劣化を小さくするために必要となる作業なのです。

東博が所蔵する11万件の文化財の中には、すでに傷みの状態が極限近くに達し、すぐに本格的な修理を施さなければならぬ作品が数多く存在します。しかしながら、経費的な制約や人的な対応能力から、年間に実施できる本格修理の数には限りがあります。したがって、作品ごとに展示・公開の必要性と劣化状態を勘案しながら修理の優先順位を付け、少数ではあっても計画的な修理を実施していく以外に方法はありません。一方、傷みの程度が小さな作品については、傷みが進行する前に応急修理を実施し、損傷を抑える必要があります。応急修理を実施しないまま作品の利用を続けることは、本格修理が必要な作品をただただ増やすことにつながります。展示・公開を伴う博物館活動においては、環境と共に、本格修理と応急修理を適切に援用することが、作品に生じる劣化の進行を抑制することにつながるのです。

## ●応急修理と本格修理

保存修理には、応急修理(Care and First Aid)と本格修理(Curative Conservation)とがあります。いずれの目的



NPO文化財保存支援機構による浮世絵のマット取替え作業  
も、作品のオリジナル部分を保存するために行う処置です。展示・公開が盛んになると、展示や輸送などの際に作品が安全に取り扱える状態にあるかどうかが、作品の保存を左右することになります。軽微な損傷が拡大する前に応急修理を施すことによって、作品の安全な取り扱いと公開が可能になります。応急修理は、必要に応じて迅速に、短時間で対応することが必要であり、長くても数週間程度で完了する内容です。東博では年間500件程度を実施します。

本格修理は、応急修理では安定した状態を回復することが既に困難な状態にある作品に対して、十分な時間と経費をかけて行う処置を言います。本格修理は、長期にわたる修理を可能にする技術者と修理場所の存在が前提となります。事前に行う徹底的な状態検査、それに基づく修理仕様の検討、修理中のあらゆる記録の徹底的な蓄積を必要とします。現在の態勢では年間100件程度の本格修理が上限です。

## ●保存修理の実践

修理に関する具体的な事例を2件ほどご紹介します。応急修理では、掛け軸の紐替え、糊浮き箇所の接着、軽微な剥落止めなどの他に、版画のマット交換も行います。1万枚を越える浮世絵コレクションは、これまですべてが酸性紙製のマットに装丁されていましたが、十数年前から中性紙のマットに交換する作業を少しずつ始めました。3年前からはNPO文化財保存支援機構の協力を得て、年間300枚の交換を目標に、作業を本格化させています。NPO文化財保存支援機構からは、大林さんをはじめ3人の専門家を博物館に派遣してもらい、作品の採寸・点検、必要な処置、新しいマットへの移し替えをお願いしています。全面に裏打ちがある場合には、原則そのままにして移し替えます。この作業を通じて、ブックマウントの

検討・改良と、技術の普及、若手技術者の育成が進むことを期待しています。素材にはノン・バッファードと呼ばれる、極めて中性に近い紙を使用しています。総ての移し替えが完了するには、少なくともあと10年は必要と思われます。このほか、展覧会に出展する模造木彫の彩色剥落止めを、館内において他の修理技術者によって現在実施しています。

本格修理は年間100件程度実施しています。ほとんどの作品は館外の工房に運び出して修理を行いますが、一部は館内において実施します。保存修復課職員の沢田と土屋による修理と、外部の修理技術者が館内で行う修理がこれに当たります。館内の修理には、作品ごとに技術者と契約するものと、年間を通じて館内に常駐し保存修復課とともに活動する契約があり、後者を保存修復支援技術者と呼んでいます。現在、館内修理では染織修理の石井美恵さんに東洋染織2件の修理を依頼し、保存修復支援技術者は鈴木晴彦さん、本多聰さん、そして林煥盛さんにお願いしております。染織の修理では、鉄媒染剤の存在の有無など、繊維自体の劣化の進行に直接係る問



保存修復支援技術者による館内での修理

題を検討する他に、裏打ちに使用する絹布に関して、より安全で安定した絹織維の製造と布の製作を検討しています。館内で実施する修理の利点は、修理技術者と共に問題点の確認と解決にいつでも当たることができ、修理自体を共有する点にあるといえます。今後とも、保存修復課と修理技術者とが日常的に係りあいながら、1点でも多くの作品を館内において修理できる環境づくりを目指しています。

### ●おわりに

私たちに必要なことは、文化財を取り囲むあらゆる環境の現状と文化財の保存状態をできるだけ正確に認識し、評価すること、次に的確な対処法を検討すること、そして長期的な観点から問題点の解決を図ること、そしてその後の様子を確實にフォローすることです。リスクを完全に無くすことは、限りある予算と人員では困難です。しかしながら、リスクを段階的に小さくして、長期にわたる文化財の保全を図ることは可能です。こうした観点に立ち、今後とも文化財保存のための事業を実施していくたいと思います。



石井美恵氏によるアイヌ民族資料チウカウカブの本格修理

## 保存修復の現場から

### コミュニケーションで守る作品の「心」

(インタビュー：嶋根隆一／八木三香)

染織品保存修復師 石井 美恵さん

### イギリスの修復技術者教育養成システム

石井さんは元々裁縫などが好きだったということでしたが、大学の卒論で中世のタペストリーの図像学をテーマに選んだことから修理を知ったそうです。染織品の修理を学ぶ学校を探してみたものの、日本には存在せず、また修復の工房で染織を扱っているのところはわずかでロンドンに留学をしました。ロンドン大学コートールド・インスティテュート・オブ・アート大学院は美術史の単科大学です。もちろん美術史の修士・博士課程もあります

梅雨の中休みとは言え、その日は東京国立博物館正門前のアスファルトが溶け出し、靴に張り付くほどの暑さでした。

空調の利いた修理室へと入ると、石井さんが笑顔で迎えてくれました。元々西洋美術史を学んでいた石井さんが、どういった経緯で修復の道に進むことになったのか興味津々。お話を伺うと、その過程が様々な形で仕事に反映されているようでした。インタビュアーの質問に対し、まっすぐ目を見て答える姿勢に、人柄がにじみ出ている感じです。

が、油絵・壁画・織物の3年間の修復コースがあります。イギリスでは修復の勉強は大学院からになるとのこと。修了してディプロマを取得すると、ある種の学芸員資格に相当するものが授与されます。

欧米でコンサバターとして働いているほとんどの方は、通常の大学を卒業し大学院で専門を学びます。その後教育システムの一環として、実際に美術館・博物館で実地教育をするそうです。見習いの研究員という立場で、1~3年過ごした後に就職先を探すというのが一般的な流れになるそうで、石井さん自身はメトロポリタン美術館の特別研究員として、2年ほど勤められました。

「私は典型的な、教科書どおりのプロセスです」と笑つていらっしゃいましたが、なかなか出来るものではありません。私だったら「学校がない」という時点で諦めていたでしょう。海外で修復を学んだ方たちの共通点は、夢をかなえるための行動力だと思います。ぜひ、見習いたいものです。

イギリスでの修復の授業には、各界の著名な研究者、それこそ驚くような業績を持った方々が来て、学生たちに教えることがあるそうです。現役で活躍している方々の生の声は、学生にとって大きな刺激になるに違いありません。これはぜひ、日本の大学でも行ってほしい授業ですね。

留学を終えて帰国した石井さんですが、当然のように就職先がありません（当然であってはいけないのですが……）。「だから自分でやっているんです（笑）」とのことでした。日本では一からの出直しになってしまふにも関わらず、それでも日本で仕事をしようと思ったのは、日本では染織品の修復は、まだ未完成の部分があり、先鞭を付ける面白みが有ったから、ということです。

### 博物館内の修復

海外と日本の修復に対する考え方を比べてみると、それほどの違いは感じないとのこと。最近の保存修復の考え方には「ミニマル・コンサーベーション」つまり最小限の処置が望ましい、とされますが、それは東洋の絵画・書跡を修復する分野でも同じです。

「日本の修復を外からだけ、もしくは作業の一部だけをみていると欧米とは違うと帰国当初は感じました。しかし東博での館内修理で特に「装こう」のなかでも日本のトップレベルの技術者達の仕事を拝見するという稀な環境に身をおかせていただいてから認識が変わり、保存の考え方には欧米と基本的に同じ方向性にあることがわかりました。館内修理は3年目ですが、私にとってのもっとも大きな成果は『劣化した糸一本を本体にもどすか否か』という問題を、欧米vs日本ではなく、油絵や日本画、考

古ではどう扱うのかについてそれぞれの領域の専門家に、それも作業途中ですばやく聞き、染織での扱い方を決めて行かれることです。これを繰りかえし行うことで、徐々に染織品の保存が他の領域と統一が取れるようなレベルに引き上げられてゆけばとても嬉しいです。東博で継承されている染織品はイギリスやアメリカで私が扱ったものとは傾向が違います。日本よりも進んでいるとはいえ、欧米の方法論をそのまま日本に移行するのは無理な話で、人々の生活にもっとも密接に結びついている織物や衣服はその培われた地域や文化、そして現在置かれている環境のなかで『製作当初の状態（オリジナリティー）』と『使用の痕跡』が守られるよう統一的に保存することが大切なのではないかと感じています」

しかし今までの日本での染織品の修復はどうかというと、もう一度使うための〈仕立て直し〉〈縫い〉が中心で、ミニマル・コンサーベーションの理念からは遠いものでした。「〈仕立て直し〉や〈縫い〉のなにが問題なのかは、例えば、日本画の絵巻の真ん中が欠損している場合、そこに巻物の端から一部を切って穴埋めをするということは行いません。それならば、衣装の展示効果のために裾を切って袖に付け足したり、袖の前後左右を替えたりするのは博物館の収蔵品では不適切ということです」と、石井さん。

現実には、「文化財」を修復しているという倫理意識を持って行う技術者と、和裁の延長線上で修復を行う技術者との間にギャップがあり、まだまだ整理されていないのが実情です。逆にそのあたりに、日本で仕事をしていく意義を感じているとのお話をでした。

東京国立博物館内で修復を行うという方針の下、修理室での作業をすることになったとき、まず言われたことは「博物館のスタッフとのコミュニケーションを綿密にとりながら作業を進めてください」ということだそうです。もとより大きな組織なので逐一、責任者への報告を欠かすわけにはいきません。劣化して落ちた糸一つでも、もとがあったと推定される箇所に戻すのか、別に保存するのか、技術者一人で勝手な判断は出来ません必ず担当者と相談し、結論を出すそうです。

館内での修復は、作業の進行面でもメリットがあります。調査時には分からなかった予想外の損傷が発見されたとき、施主である博物館側とすぐに話し合いができ、納期などスケジュールの変更を含めた検討も行えるのは大きな利点です。

また、先の石井さんの言葉どおり、新しい修理方法の検討という面でもメリットがあります。染織品、油絵、版画、日本画といった多分野にわたる技術者と同じ空間に居て、同じ意識で保存・修復作業をするということは、そ

それぞれの分野のやり方を吸収できる、絶好の機会になります。

ちなみに、メトロポリタン美術館での修復事情をお聞きしたところ、美術館内の修復技術者はみな職員で、館の通常業務として作業を行っているそうです。特別な事情がない限り外の技術者に出すことはないので、責任者、研究者、技術者の連携の下、作業を進めているとのことです。

### 糸ひとつにもこだわりを

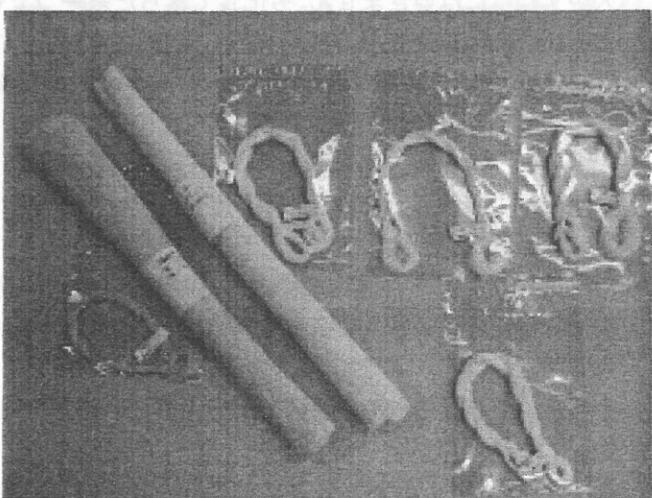
修復に使う糸等は、材質、強度とも修理品と同じ糸が望ましいことは言うまでもありません。しかし工業製品化された新しい綿糸などは、修復に向くとは言えません。熱処理や薬品の使用によってたんぱく質の劣化等がおこり、またツヤの違いなどで使用できないものが多いのが現状です。

幸いなことに、日本には現在でも綿の文化が存在しています。ごく一部ですが伝統的な養蚕が行われ、糸に紡がれています。そこで、古い綿を分析し、昔の製法で製糸、機織することで、伝世品に近似した風合いを持った綿布を作れないかということを、長野県の志村明さんという方が研究しているそうです。試験的に作成した綿のサンプルを見せていただきましたが、同じ蚕から10通りほどの製法で作られたものは、手触り、強さなどがそれぞれまったく異なるものでした。

また石井さんは、染料の使い方もたんぱく質を壊さないようなやり方を採用しています。

とにかく修復には、製作工程、原料が分かっている安全な材料を使いたいと石井さんはおっしゃっていましたが、染織品に限らず文化財修復に使用できる材料の確保は大きな問題です。

※志村さんに関しては、今後、お話を伺う予定です。



様々な方法で紡がれた糸と布のサンプル。これらの中から最適なものを選び出して使用する。

### 作品の「何」を残すか

ここで、現在石井さんが修理を行っている作品を見せてもらいました。「チ・ウカウカ・ブ」というアイヌの民族衣装です。チ=私、ウカウカ=縫い縫い、ブ=布という意味で、「私が縫った布」と訳せます。明治時代に生存した明石和歌助（旧名：イカシワッカ）という人が着ていた衣服で、縫ったのはその妻とのことです。袖の部分が鉄媒染の木綿糸で作られているため、酸化による劣化が痛々しく、経糸はばらけて緯糸だけでかろうじて保っているという状態です。通常は縫い目をほどいてパーツに分解することを考えますが、この作品に関しては分解せずそのまま修理することに決まりました。劣化して絡みあつた経糸をほぐし、適切な順番で揃えて補強布に縫いつけてゆく。ずっと作品を見つめている石井さんの目には、ばらばらになった経糸が、もとはどこに在ったかがだいたい分かってくるそうです。電化製品のコードが絡み合っただけで癪癩を起こす私には絶対無理な作業です。まったく気の遠くなる思いです。

作品に物理的な処置を施さなければならぬ「修復」という作業は、宿命的に作品がもともと持っていた何らかの情報を失わせることになります。しかし処置を施さなければ遠からず崩壊していく作品に対峙したとき、この作品の「何を残すか」が重要な問題となります。そのため技術者は、専門の研究者に作品のバッググラウンドを教えてもらうと共に、施主側がどのように保存したいのかを見極める必要があります。ディスカッションを重ねて修理のゴールが決まると、技術者の処置の方法論が決まってくるのです。

例えば、今回の衣装に関して言えば、縫い目一つとってもそれが貴重な情報となります。東京国立博物館の元学芸員で文化庁のアイヌ研究者の佐々木正直先生は「縫い糸から、これを縫ったアイヌの母の心を、後世の研究者やアイヌの人々に感じてもらいたい」という意図をお持ちでした。

染織品は特に、縫った人着た人の「愛情」とか布の「ぬくもり」というような、抽象的な情報を多く伝えていました。それを遺してほしいという研究者の要望を、石井さんは受け止め、修復方針に反映していきます。こうした石井さんの感受性は、大学時代に学んだ美術史／哲学から大きく影響を与えられているように思いました。イギリスで教育を受けていたとき、授業に来てくれた著名な研究者 ジャネット アーノルド先生が「服飾研究者にとって、修理した資料にはもはや興味が持てない」と言った言葉がとりわけ印象深いそうです。ともすれば科学に偏り、物理的に存続さえさせれば良しと考えがちな「修復」という作業にとって、資料にこめられた「歴史的背景」「こころ」など感覚的な情報を遺すことの重要性を思い起こさせる言葉です。優れた修復技術者にはそんな

情報をキャッチする感性も必要とされるのかもしれません。石井さん自身、そんな鋭敏な感性を持った技術者のひとりなのでしょう。

しかしこうした感性も、さまざまな研究者や他分野の技術者との触れ合いの中でこそ触発されるのかもしれません。とかく外界と遮断されがちなフリーの技術者にとって、館内は実に貴重な空間であるということができると思います。

織物というものは、物理的な情報も豊富に搭載していますが、それだけではなく、織った人の心も織り込まれていて、感性の鋭い人は無意識のうちにそれを感じているんじゃないかなと思いました。

劣化した作品からもう一度制作者の「思い」を紡ぎ出す「染織品修復」という作業は、「心」を次の世代に伝えるリレー走者なのかな、と思った次第です。

石井美恵さんプロフィール  
1993年3月 慶應義塾大学  
文学部哲学科美学美術史専攻卒業。

1996年6月 ロンドン大学  
コートールド・インスティテュート・オブ・アート大学  
院付属テキスタイル・コンサベーション・センター、染織品保存学科ディプロマ課程修了。



1997年9月～1999年12月 メトロポリタン美術館、染織品保存部、特別研究員。

2000年4月 女子美術大学非常勤講師。

2003年4月 共立女子大学家政学部人間生活学科博士課程後期入学。

2004年1月 フリーランスの染織品保存修復師として現在に至る。

## 書籍紹介

### 『古典籍が語る 一書物の文化史ー』

山本 新吉 著 八木書店発行

2004年11月25日発行 定価：3,600円+税 304頁 A5判

この本は文化庁の調査官、監査官、奈良国立博物館館長を歴任した著者が、その永年の経験を元に古典籍を分かりやすく解説した、書誌学の入門書と言うべき本である。全4章立ての本の内容は、その半分近くが第2章「古典籍が教える書誌学の話」に費やされている。まったく書誌学というものは、専門でないものから見ると分かりにくいものなのだが、この本はそうではない。できるだけ専門用語を廃し、豊富な具体例を示しながらの解説は、書誌学をまったく知らないものでも読み進むことができる。

日本の文化遺産は、主に「官」よりも「民」によって伝えられてきた。神社仏閣の宝物や〇〇家文書というものがそれである。その中で最も優れたもののひとつに冷泉家時雨亭叢書がある。本書はまずその文書群の解説を通して、古典籍の分析、研究等の具体例が書かれている。それを踏まえて書誌学の話になっていく。本の形態の変遷、題名の書き方、書式、奥書を解説し、伝領記、料紙の解説と進む。そして古典籍の調査、中国・朝鮮からの伝来を解説している。

先に書いたように書誌学の章は面白く、分かりやすく書かれている。特に研究者としての視点を研究書から読み解くのは、なかなか困難なものであるのに対し、丁寧な解説を読み進めるうちに自然に分かってくるようで楽しい。なるほど、ここをこのような視点で見るのか等々、いろいろと参考になる。この本を読むと、古典籍の見方も今までと違う見方で見ることができるように気がする。下手をすると、表装と本紙の欠損部ばかり目がいくような見方をすることも多いが、こ

れでは勿体なさ過ぎる。文書もなかなか面白いものだなと思った。

ただ、残念なことが一つ。形態の変遷の項で語られる巻子や折本などはいいのだが、粘葉装本(でっちょうそうほん)、綴葉装本(てっちょうそうほん)の解説に、図版がなかったのはいただけない。文字だけで伝わる内容ではないと思う。



これらの古典籍が考古資料ではなく、歴史資料として現在に伝わってきたことは素晴らしいことだと思う。これは古典籍だけのことではないが、紙や布に書かれたような脆弱なものを火災などの災害から守り、伝えるための先人たちの努力は賞賛に値する。保存に適した蔵を造り、なおかつその蔵さえも完全には信用せず、いつでも少人数で持ち出せるような体制をとっていた。そのおかげで我々は貴重なものを目にすることができます。その資料を表面だけ見ているのでは申し訳ないように思える。自筆本、写本に関わらず、それにはその時代の情報等を持っていて、貴重な資料である。題名にあるように「古典籍が語る」のは、本文に書かれた情報だけではない。それが理解できると敬遠しがちな資料も、また興味深く感じることができそうだ。

(鳴根隆一)

# JCPからのお知らせ

## 香川県被災文化財救援活動参加者募集のお知らせ

文化財保存支援機構では、去年台風16号によって被災した香川県観音寺市郷土資料館所蔵品の救援活動を行っております。次回（4回目）の救援活動は、9月18日（日）、19日（月／祝）に行います。この日程で救援活動に参加したい会員を募集します。

募集要領は、以下の通り

記)

日 時：平成17年9月18日（日）10:00～16:30  
9月19日（月祝）9:00～16:00  
休憩時間：昼食時、2時間毎に15分程度  
場 所：香川県観音寺市郷土資料館（現地集合）  
(観音寺市駅からタクシーで5分ほど)  
作業内容：水浸被害文書の洗浄など（当機構HPのプロジェクト及びライブリーライブをご参考ください）  
経 費：交通費 往復20,000円まで、  
宿泊費 1泊8,000円を援助  
文化財保存支援機構負担にてボランティア保険に加入  
応募期限：平成17年9月13日（火）  
☆メール、電話、FAXにて、下記事務局までご連絡ください。

※18日、19日のどちらか1日のみの参加でも可。参加時間帯も相談に応じます。

※資格は問いませんが、ボランティアリーダー 鈴木英治氏（吉備国際大学）の指示に従って行動してください。

※応募者多数の場合は、お断りする場合もございます。

※詳細は、参加決定者に別途ご連絡いたします。

## 香川県被災文化財救援基金 経過報告

「香川県被災文化財救援基金」には、おかげさまにて総額383,000円のご寄付が寄せられました。暖かいご支援をどうもありがとうございました。

ここに寄付者名を記し、感謝申し上げますと共に、現在の寄付金使用状況をご報告させて頂きます。

最終募金額：383,000円（191.5口×￥2,000）

ご寄付くださった方のお名前：新井榛名様/安藤智之様/石山表具店・石山達也様/今西寿光様/株宇佐美松鶴堂・宇佐美直秀様/内田正俊様/大藏綾子様/大林哲夫様/長田寛康様/株和蘭画房様/香川県歴史博物館有志様/株コスモインターナショナル・岡田泰吉様/加藤章男様/(財)元興寺文化財研究所様/株光影堂様/有坂田墨珠堂様/佐藤隆明様/沢田正昭様/嶋根隆一様/鈴木晴彦様/瀬戸口啓様/竹内進一様/朋世様/竹ノ下磨須子様/塚尾富子様/富永米山堂様/奈良真一様/難波田英子様/西田昌永様/西山要一様/根本則男様/半田達二様/半田正博様/百元節様/平井茂子様/増澤文武様/松本洋子様/三浦定俊様/三輪嘉六様/有)武蔵野文化財修復研究所様/矢野俊昭様/村上直子様/村山隆雄様/八木三香様/吉田淳様/渡部明夫様/渡辺務様(アイウエオ順)

## 支出：

調査旅費1名（1月9日 京都→観音寺市）￥20,060

活動旅費（'05年1月、2月、5月、6月）￥182,080

ボランティア保険（@￥300×延べ9名）￥2,700

消耗品（紙類）￥7,350 備品（掃除機）￥42,315

郵送料その他 ￥6,940

残高 ￥121,555

## NPO JCP NEWS

### 第11号

2005年7月31日発行

特定非営利活動法人 文化財保存支援機構

〒160-0003

新宿区本塩町22番地102号

TEL: 03-5363-4533 FAX: 03-3341-8577

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

## ご入会ありがとうございました。

（平成17年7月31日現在入会者数）

理事 6名 運営会員 16名

登録会員 156名 一般会員 109名

賛助会員 24件

(株) 宇佐美松鶴堂 宗教法人 正法院

(株) 岡墨光堂 靖斎文化財保存研究所

(株) 和蘭画房 日本通運株式会社美術品事業部

(有) 桂文化財修理工房 (株) 半田九清堂

(財) 元興寺文化財研究所 長谷川 聰

京都造形芸術大学 百元 節

歴史遺産研究センター (株) フレンドトラベル

(株) 芸匠 (株) 文化財保存

(株) 光影堂 (有) 文化財修復技術研究所

コンテンツ (株) 溝川商店

(有)坂田墨珠堂 他個人3名

(株) 修美 (アイウエオ順 敬称略)

## NPO JCPの活動に参加してみませんか？

### □ 登録会員：年会費 7,000円

文化財保存に関わる専門的技能を持ち、プロジェクト遂行に協力する個人。

登録会員は文化財の保存事業を行うための専門家で、文化財に直接関わる専門家とは限りません。

### □ 一般会員：年会費 5,000円

この法人の目的に賛同し、支援する個人。

### □ 賛助会員：年会費 一口50,000円

この法人の目的に賛同し、支援する団体、個人。

### 会員特典 季刊情報誌の送付

講演会/研修会等への優先参加

※入会ご希望の方は、下記のファックス、お電話、メールにて申し込み用紙をご請求下さい。おり返し資料をお送りいたします。また、ホームページからでも入会申し込みができます。

TEL/FAX: 03-5363-4533

E-mail: jimukyoku@jcpnpo.org

URL: www.jcpnpo.org

※この他にも、随時寄附を受け付けております。下記の郵便振替、あるいは銀行口座をご利用下さい。

郵便振替 00120-4-10545 NPO JCP

UFJ銀行 四ツ谷支店 普通預金 3960340

### 〈理事〉

三輪 嘉六（理事長）

大林 賢太郎（副理事長）

西浦 忠輝（副理事長）

伊原 恵司

白井 久明

増澤 文武

〈編集協力〉 嶋根 隆一（伝世舎）

〈事務局〉 八木 三香（事務局長）

松本 洋子